

奄美ワーキンググループメンバーヒアリング記録(1)

日時：平成26年9月28日(日) 対象者：服部 正策

(1) 奄美の生態系、生物多様性の維持における攪乱の必要性について

- ・奄美大島空港から名瀬にかけての景観は世界自然遺産の島と思えない。斜面崩壊の痕跡やその後の復旧工事後の姿、北部のマツ枯れはさらにひどくなる状況も想定される。また、遺産価値を証明する生き物は、簡単には見せることはできず、IUCNの視察については課題が多い。
- ・奄美の生態系や生物多様性の価値は、科学的根拠によって説明できると思われる。ただ、その維持に人間がいかに関わってきているかを理解してもらうことは難しい。森林化が進行している現状では、将来遺産価値であるアマミノクロウサギ等を維持できるとは思えない。奄美の自然は人間が利用しながら維持されてきたものであり、その中で遺産価値を構成する生物も生息してきたことを、明確に伝えないと混乱と誤解を生むことになる。
- ・アマミノクロウサギは、マングース駆除により増加していると言われているが、より長いスパンで見れば、大きく生息個体数が減少した状態で、レベルの違うレンジで見た時のわずかな増加を捉えているに過ぎないのではないか。
- ・奄美大島、徳之島は、人間が住む以前はシカやキョン等の草食獣によって明るい草地環境が維持されていたと思われる。人間が住むようになってから、森林が伐採されるようになり、草食獣に代わって草地が維持されてきた。化石燃料の普及後に森林資源の利用は一時的に減ったが、パルプ材としての利用が始まり、草地環境は維持されてきた。1990年以降は伐採が行われず森林が生長しつづけ、奄美の長い歴史の中において経験したことのないほど成熟した暗い森林の占める割合が大きくなっていると考えられる。
- ・多くの森林伐採が行われていた頃は、より多くのアマミノクロウサギが生息していたと考える。嘉徳～青久、市崎周辺、川内川周辺では、足の踏み場もないほど糞が見られた。アマミノクロウサギの餌は草本であり、生息数は草地環境の広さにより左右される。巣穴を作る森林の近くに攪乱された草地が相当量維持されていた時代の方が、より多く生息していたと考えられる。
- ・現在、道路で事故死が多発している原因は、山中に餌場となる草地がなくなり、道路沿いの明るい環境下に出現した草地を餌場として利用せざるを得ないことが原因であると考えられる。
- ・以前は集落があり、周辺に段々畑が相当広範囲に広がり、さらに山側に草地が維持され、更には森林が存在した。段々畑にアマミノクロウサギが多く出現したという話は聞いたことはなく、農業被害があった話も聞かない。当時のアマミノクロウサギの行動圏も巣穴を作る森林部と段々畑の間に存在した草地が中心だったと思われる。
- ・このように、常に一定以上の攪乱によって維持されてきたのが奄美の自然の特徴であり、その価値を評価するというのであれば一定以上の攪乱を認め、維持していく必要がある。
- ・遺産地域の管理では、核心部はともかく(本来は核心部においても攪乱は必要と考えるが)、せめて緩衝地域では計画的に攪乱(小規模な伐採)を起こしていく必要があり、その仕組みを確保する必要がある。
- ・自然災害による攪乱もあるが、近年の極端な集中豪雨では表層崩壊に留まらず、深層崩壊になり、その後の再生に長い時間を要する。
- ・アマミノクロウサギやアマミヤマシギ等の動物種だけでなく、リュウキュウスズカケ、アマミ

スミレ等の植物種も攪乱を必要としており、森林化の進行に伴い減少していく傾向にある。

- ・自然保護団体や研究者、IUCNの専門家には森林伐採を許容しない意見が多いので、遺産登録における基本的方針や姿勢として、攪乱の必要性について理解を得ておかなければならない。一方、地元住民の中には世界遺産になると島内全域を森林にしなければならないと誤解し、登録に反対の意見をもつ人がいるのも事実。地域住民の理解を得るためにも、一定の森林伐採が必要であることを明確に示す必要がある。自身が所有する山を利用していない住民が大半だが、自分の山が利用できなくなるということについては反対の立場をとる人が多い。

(2) 森林伐採技術の継承と維持のための新たな仕組みについて

- ・奄美大島には、架線集材を用いて地山を傷つけずに森林を伐採し、資源を回収する技術を有する職人(山師)が、少数ではあるが存在する。こうした技術は産業としてのパルプ材生産の林業が継続できなければ、継承されずに失われてしまう。
- ・皆伐をすると土壌流出が起こるといっている人がいるが、架線集材を用いれば地山を傷つけることはない。内地で最近行われている、ジグザグに土を削りながら伐採していく手法を奄美で行えば、相当な土壌流出が起こると思われる。架線集材でも、伐採木を全て取り出すのではなく、細い樹木は少し残しておくことで昆虫相のために良いと思う。
- ・林業の技術継承ができなくなるのであれば、生態系保全のための森林管理としてでも、伐採が持続的に継続される新たな仕組みが必要である。
- ・以前、環境省が森林の管理手法の検討と伐採前後のモニタリング調査を実施していたが、それらの検討と調査を継続し、攪乱と再生のメカニズムやアマミノクロウサギ等の生物の利用状況等のデータを収集・解析していくことが重要。

(3) 徳之島について

- ・徳之島では、農地と森林が接しており、農地の縁辺部をアマミノクロウサギが繁殖場所として利用するようになっている。農地周辺をイノシシ柵が囲み行動圏を分断してしまっている。
- ・さらに、アマミノクロウサギがサトウキビの新芽の味を覚えてしまい、本来の餌であった草本類よりも選択的にサトウキビを採食しようとする傾向が見られる。
- ・徳之島には耕作放棄地がないと言われているが、井之川岳東山麓の裾野や轟木の西側等には草地在り放棄された後に森林化しているエリアもあり、それらを草地に戻す等の攪乱は必要。ただ、徳之島では長らく林業は行われておらず、森林施業ができる人はもういないだろう。
- ・住民が世界遺産に対して拒否反応を示すような提案をすると、全く動かなくなる恐れがあるので、住民の理解と協力を得ることは極めて重要。農地を潰し森林を再生し、コリドーをつくるのでは、住民の理解は得られないのではないかと。また、森林によるコリドーでは(奄美大島の本茶峠周辺がそうであるように)アマミノクロウサギの生息域が拡大するとは限らない。
- ・住民にもメリットがある仕組み(農地の周辺にブッシュを確保することに対する環境支払い等の仕組み等)が必要になるのではないかと。
- ・徳之島では陸海間の連続性のある河川はダム建設により失われたが、クラゴーは地下で陸海がつながっている。特に石灰岩地に特有の植物等が、内陸の水の入口と海岸部の水の出口付近にそれぞれ生育しており、そのつながりを理解しやすい。